

平安時代の「活用語連体形十なかに」をめぐって

白井清子

はじめに

筆者（白井）は以前、『古典基礎語辞典』（大野晋編 角川学芸出版 二〇一一年）の「うち」「なか」の項を担当執筆したときに、活用語の連体形に下接する「うちに」と「なかに」にどのような違いがあるのか考えたが、今回、それについて再度考えてみることにした。「活用語連体形十うちに」に関してはずすで多くの研究がなされている（注1）ので、ここではあまり論じられない「なかに」を中心に述べることにする。まず源氏物語について述べ、そのあとで、他の作品についても述べる（注2）。

源氏物語の「活用語連体形十なかに」の用例の確例は五三ある。これは次の手順を経て調べた数である。

○用例の検索は『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』（勉誠社 一九九四年）（以下、『用例総索引』と表記）のうち、別項となっている（御中）・（仲）や（なかの―）の項をのぞいた「なか（中）」の項のみ採った。

○「なか」と仮名で記されているもののみをもちい、漢字「中」とあるものは除いた。この『用例総索引』は『源氏物語大成 校異篇』および『同 索引篇』（以下、『大成』と表記）をもとにしているが、漢字・仮名の別は

『大成』の本文の表記をそれぞれ示している。漢字「中」は『観智院本類聚名義抄』でも「ウチ・ナカ」両方ある。いまは「うち」と区別したので、『用例総索引』の平仮名表記の例だけを用いる。

○用例の本文は『日本古典文学全集 源氏物語』（阿部秋生ほか編 小学館 一九七〇年）（以下『旧全集』とする）によった。ただし、「なか」は『大成』本文の表記とし、それ以外でも表記を変えた部分がある。

○用例本文下の数字 1212⑩（四264④）は所在箇所が『大成』1212ページ12行目で『旧全集』第4分冊264ページ4行目であることを示す。

○解釈に関しては『旧全集』その他の注釈本を参考にした。

○『大成 校異篇』で「なかに」の部分に漢字・仮名以外の異文があるものは意外に少ない。異文は用例ごとに示しておく。異本略称は『大成 校異篇』にしたがう。ただし、異文のないものはわざわざ断らない。

一

源氏物語の「活用語連体形+なかに」は五三例あり、次のように分類される。

A 空間的意味。「ことばのなか」のような場合も含む。 五例

ア （桐壺更衣亡キアト、勅使朝負命婦方更衣ノ母ヲ訪レル。）

【命婦詞】「若宮の、いとおぼつかなく、露けきなかに」「涙ニクレル邸デ」 過ぐしたまふも、心苦しう思さるるを、とく参りたまへ」

桐壺12⑩（一104⑤）

イ 「かかるしげきなかに、何心地して過ぐしたまふらむ」

蓬生535⑦（四521①）
なかに——中に（青・榊池） しげきなか——の中（別）

ウ (東宮ノ御元服ガ近ツキ、自分ノ縁者ノ入内ヲ考エル貴人ガ多イモノノ、明石ノ姫君ノ入内ヲ考エル源氏ノ手前、人々ハ遠慮シヨウトスル。)

〔源氏詞〕「宮仕への筋〔宮仕エトイウ道〕は、あまたあるなかに、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ〔多クノ人ガ居ル中デ、ワズカノ優劣ノ差ヲ張り合ウノコソ目指スベキ道ダロウ〕」

梅枝 983③ (三406⑧)

このウは次のBの「同類の範囲」の意味ともとれるが、いまは「多くの女性たちがいる場で」と解釈しておく。ほかに、幻1413③、竹河1482⑭がこのAに属する。

Aの空間的な意味は、連体形に下接する「なかに」以外の、例えば「池のなかに」(胡蝶781⑭)のような、単なる「なか」の用例の中では非常に多い。「なか」一三〇例中四一例。しかし、連体形に下接する形では多くない。

B 同じ性質や特徴をもつ複数のものを含む範囲を示し、「なかに」のあとに、その範囲内に含まれるある特定のものごとについて述べるもの。これをさらに二類に分け、それぞれB1とB2とする。

B1 「なかに」のあとに、特定なことがらがすぐに示される(あるいは、直接示されていない)場合。三例(三例だけ示す)

ア いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむことなきにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。 桐壺5① (一93③)

イ (須磨へ退去シヨウトスル源氏ニ夕霧ノ乳母ガ言ウ)

「いつとなく、別れといふ文字こそうたてはべるなるなかに、今朝はなほたぐひあるまじう思つたまへら

るるほどかな」

須磨400⑩(二161①)
なかにも——中に(別)

ウ

「六条院二」あまたつどへ給へるなかにも、この宮「女三ノ宮」こそは、かたほなる思ひまじらず、人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくてものしたまふべきを

横笛1273⑧(四339⑪)
なかにも——中にも(青・横陽・なかに(別・保)

アやウのような、同じ立場や特徴を有する人々に関する場合が多いが、イの別れのように、ことがらの場合もある。

B2 「なかに」のすぐあとに「特に……は」「……」にあたることばが書かれていなかったり、すぐにはわからなかつたりする場合。文の前後をよく読むと理解できるが、文の外形からは見えない。引用部分が長くなるが、それが特徴でもあるので、そのまま示す。三例。

ア (源氏ハ須磨ヘノ退去ヲ決意シ、人々ト訣別スル)

よろづの事、来し方行く末思ひつづけたまふに、悲しきこといとさまざまなり。うきものと思ひ棄てつる世も、今はと住み離れなんことを思すには、いと棄てがたきこと多かるなかにも、姫君「紫ノ上」の明け暮れにそへては思ひ嘆きたまへるさまの心苦しうあはれなるを、行きめぐりてもあひ見むことを必ずと思さむにてだに、なほ一二日(ひとひふつか)のほど、よそよそに明かし暮らすをりだに、おぼつかなきものにおぼえ、女君も心細うのみ思ひたまへるを、幾年(いくとせ)そのほどと限りある道にもあらず、逢ふを限りに隔たり行かんも、定めなき世に、やがて別るべき門出にもやといみじうおぼえたまへば、忍びてもるにもにもやと思し寄る折あれど、さる心細からん海づらの波風よりほかに立ちまじる人もなからんに、かくらうたき御さまにてひき具したまへらむもいとつきなく、わが心にもなかなかの思ひのつまなるべきをなぞ思し返すを、女君は、「いみじからむ道にも、おくれきこえずだにあらば」とおもむけて、恨めしげにおほ

いたり。

須磨 395⑧ (二153⑭)

なかにも——中にも(青・横肖)

「いざとなると諦めにくいことが多々あるが、そのなかでも紫の上との別れが諦められないことである」とあれば、先のB1「同類の範圍を示す」に分類できるが、ここは紫の上が嘆くさまと、それを見て千々に思い乱れる源氏のさまが描かれ、延々と四〇〇〇字以上もつづく文になっている。したがって、この「なかにも」は「同類のものの中で」と単に範圍を示す用法とは分離して考えたい。思い棄てがたいことが多くあるという状況を描き、そのあとで特別のことがらについて詳しい状況を述べている。

イ (須磨カラ源氏ハ藤壺ニ文ヲ送ル)

「松島のあまの苫屋もいかならむ須磨の浦人しほたるころ いつとはべらぬなかにも、来し方行く先かきくらし、汀(みぎは)まさりてなん」
なかにも——中にも(青・横肖)・中に(別・陽)
須磨 415② (二180⑭)

「私の帰りをお待ちくださる松島の海人(あま)——尼のお住まいもいかがでしょうか、こちら須磨の浦では涙の日々を過ごしているこの頃に。『悲シサハ』いつと限ったことではありませんが、その中にも、『近頃ハ』過去も未来も聞にとざされたような気がして、涙がいつそうあふれてまいります。」

「いつと限ったことではない中でも」としつつ、『近頃は』と限定したことを示していない。

ウ (六条御息所ガ死去シ、前齋宮ハ悲シミノ日々ヲ送ッテイル)

同じき御親と聞こえしなかに、片時の間も立ち離れたまつりたまはでならはしたてまつりたまひて、齋宮にも親添ひて下りたまふことは例なき事なるを、あながちに誘(いざな)ひきこえたまひし御心に、限りある道にてはたぐひきこえたまはずなりにしを、干(ひ)る世なう思し嘆きたり。

澤標 510⑬ (二511⑬)

同じ御親と申すなかでも、前斎宮にとつて六条御息所は世間の御親とは異なり特別で、というのであるが、特別の事情がいきなりくわしく書かれている。

B1とB2は本質的には同じ用法ともできるが、一見すると、文の構成上かなり異なることがあるので、注意したいと思ひ、あえて別のグループに分けた。

C その他 AやBの用法から変化したと考えられるが、「なかに」に示される「なか」の意味が「場」「時」「機会」などの意味を漠然と含む広がりのある「状況」を指している。接続助詞的用法ともいえるものである。
七例

ア (内大臣ハ雲居雁ノ乳母タチニ言ウ。「雲居雁ト夕霧ニモット注意スルベキデアッタ。雲居雁ヲ本邸ニ移スツ
モリダ。モットモソナタチハ二人ノ仲ガ成就スレバヨイトハ思ツテイナカッタダロウ、ト。ソレヲ聞イタ
乳母タチハ)
いとほしきなかにも、うれしくのたまふと思ひて
少女685⑦(三39⑩)

姫君をお気の毒だと思ふ気持ちを抱きつつも、同時に、内大臣が自分たちを理解してうれしいことをおっしゃってくださったとも思っている。乳母たちの気持が複雑に混ざり合っている。気の毒な気持ちを抱くなかにも、うれしいと思ふ気持ちを抱いている、ととれば、「なかに」は前件の状況下ながら後件の状況でもある、となる。

イ (夕顔ノムスメ玉鬘ハ右近ト長谷寺デ劇的ナ再会ヲシテ、源氏ノモトニ引キ取ラレタ。源氏ハ親ノヨウナ形
ヲトリナガラモ、内心玉鬘ニ心ヒカレ、アル夜玉鬘ニ思イヲ打チ明ケ、身ヲヨセテキタ。玉鬘ガ疎マシク思
ツテイル風ナノデ、源氏ハソレ以上ノコトハセズ戻ツテイッタ)

女君「玉鬘」も、御年こそ過ぐしたまひにたるほどなれ、世の中「男女間ノコト」を知りたまはぬなかに、すこしうち世馴れたる「男女ノ事ニ経験ノアル」人のありさまをだに見知りたまはねば、これよりけ近きさまにも思し寄らず、思ひのほかにもありける世かな、と嘆かしきに、いと気色もあしければ、人々「女房ヲチ」、御心地悩ましげに見えたまふ、とめてなやみきこゆ。

胡蝶798⑬(三)181⑭
なかにも——中にも(青・横)

このとき玉鬘は二十二歳で、普通なら結婚していてもよい年齢である。しかし、自身経験がないばかりでなく、九州での生活ではそういう経験のある人の話を耳にするということさえもなかった。だから、これ以上に睦びあうさまなどは想像もできないし、不快に感じるばかりだ。玉鬘自身の未経験の状況と、情報として見聞きすることのない状況が「なかに」でつながっている。「なか」にはある「場」を表す用法があるが、その場がもつと広い意味の「状況」を表わしていて、より漠然とした意味の用法になっている。単に自分の体験として「世の中を知りたまはぬ(男女の仲のことを知らない)」という一般的な事柄だけでなく、「すこしうち世馴れたる人のありさまをだに見知りたまはねば男女ノ事ニ経験ノアル人ガドウイウ風ニ感シルモノカ、ドウイウ風ニ振ル舞ウモノカモゴ存ジナイノデ」。「なかに」を「その上」と訳したくなるような文脈である。前件の状況下ながら後件の状況でもある。

「活用語連体形ナうちに」が現代語の「うちに」や「間に」と解すれば当たらずといえども遠からずという状況であるのに対し、この「なかに」の場合は現代語の「なかに」では解することができない。

ウ (柏木ハ病ガ重ク、参内デキナイ日々ガ続イテイル)

「柏木ガ」かく、限りと「帝ハ」聞こしめして、にはかに権大納言になさせたまへり。「昇進ノ」よろこびに思ひおこして、いまひとたびも参りたまふやうもやあると思しのだまはせけれど、さらにえたためらひやりたまはで「柏木ノ御病勢ハ一向ニ怠ルコトナク」、苦しきなかにもかしこまり申したまふ。

柏木1244①(四)302⑫

なかにも——中にも(青・櫛)・心ちにも(別・保)
苦しい状況下ながら、病床からお礼を申しあげなされる。ある状況を描きつつ、一方でこういうことも…と複雑な状況を叙述している。

エ (大宮ガが亡クナツタ時、実子ノ致仕ノ大臣ハ通り一遍デアツタガ)

六条院「源氏」のなかなかねむころに後の御事をも宮みたまうしが、「夕霧ハ」わか方さまといふなかにも、うれしう見たてまつりし。

夕霧 1344⑨ (四431⑩)
なかにも——中にも(青・三)

後の法事を、源氏は実の親でもない大宮のために心をこめて営まれた。それは夕霧側からみれば、自分の親がらうれしいことと拝見したのだった。ある状況下にあつて特にとつてという用法。「なかに」の前に述べた条件下ではあるがという用法。

オ (紫ノ上亡キアト、源氏ハ紫ノ上ヲ嘆カセタ過往ヲ思ウ)

入道の宮「女三ノ宮」の渡りはじめたまへりしほど、そのをりはしも、「紫ノ上ハ」色にはさらに出だしたまはざりしかど、事にふれつつ、あぢきなわぎや、と思ひたまへりし気色のあはれなりしなかにも、雪降りたりし晝に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけしきはげしかりしに、いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し、せめて紛らはしたまへりしほどの用意などを、夜もすがら、夢にても、またはいかならむ世にか、と思し続けらる。

幻 1405① (四509⑬)
なかにも——ころにも(別・飯)

はじめに紫の上が失意のなかにいることを述べ、「なかにも」のあとで、特に印象深く源氏の心に残っている仔細な記述が続く。あとに述べられるありさまは詳細で、読み手さえもせつなくなつてしまふような記述である。

カ (匂宮、大内記カラ宇治ニ薫ノ隠シ女ガイルコトヲ聞ク)

「匂宮ハ」わが御方「ヨ自分ノオ部屋」におはしまして、あやしうもあるかな、宇治に大将の通ひたまふことは年ころ絶えず、と聞くなかに、忍びて夜とまりたまふ時もあり、と人の言ひしを、いとあまりなる、人の形見とてさるまじき所に旅寝したまふらむこと、と思ひつるは、かやうの人隠しおきたまへるなるべし、と思しうることもありて：

なかにも——中にも(青・横肖)・中にも(別・麦桃)・うちにも(別・宮園)

浮舟1865②(六105⑨)

匂宮は薫の行動について話に聞いていたが、単に大君の旧邸だからというのではなく、実は女性を隠していたのかと思ひあたる。「なかにも」のあとに、実はと予想外のこと展開する。

キ (浮舟入水ノ報ノアト、薫ハ病氣ノ匂宮ヲ見舞ツタ)

女君「中ノ君」、このことのけしきは、みな見知りたまひてけり。「あはれにあさましきはかなさのさまさまにつけて心深きなかに、我一人、もの思ひ知らねば、今までながらふるにや。それもいつまで」と心細く思す。

蜻蛉1947⑦(六213⑫)

なかに——中に(青・横池)

中の君は、この一件(匂宮と浮舟のこと、浮舟が死んだということ)のいきさつをすべて「存じなのであった。「思えば姉大君も妹浮舟も男性との関係がうまくいかず、あれこれと思ひ悩むことが多く若くして命が果てたが、そういうなかで自分一人苦勞も知らずに今まで生きながらえているとは。しかしそれもいつまでのことか」と考える。姉妹たち三人のなかで、自分だけが、という点を中心に考えればB1に分類できるが、それだけではなくもつと中の君をとりまく状況のなかで、自分一人と寂しさを感じ、考えているのではないだろうか。

このCに分類した「なかに(も)」の用法は、ある状況を述べたあと、より詳しい、あるいは、他に類の無いよ

うな特徴的ことがらを具体的に述べる場合にもちいられたり、ことがらを多面的に描く場合に用いられている。

二一

「活用語連体形十なかに」の用例について、源氏物語以外の資料としては竹取物語・土左日記・枕草子・紫式部日記・栄花物語を調べた。

竹取物語 用例なし

土左日記 用例なし

枕草子には確例はなかった。三巻本枕草子に「中に」と漢字表記で次の一例があったが、能因本では「うちに」となっていた。

かう語らひ、かたみの後見などする中に(能因本 内に)、なにともなく、すこしなかあしうなりたる、「則光ガ」文おこせたり。

紫式部日記 用例なし

(里にまかでたるに)

栄花物語は次のようになっていた。

『栄花物語本文と総索引』(以下、『栄花総索引』で「なか」の仮名書きの例は九六例、そのうち、「活用語連体形十なかに」は二六例であった。(それ以外の仮名書きの「なか」は七〇例)

その栄花物語の「活用語連体形十なかに」の二六例の内訳は以下のようになっている。さきの源氏物語の用例の分類に従って示す。なお、用例本文は『日本古典文学大系 栄花物語』(以下『旧大系栄花』と表記)による。

「なか」は底本の表記に従い、その他の部分も表記を変えた場合がある。用例のあとの数字は『栄花総索引』巻数ページ数と行数（『旧大系栄花』の冊ページ数行数）である。

A 空間の意味 一例

群鳥（むらどり）の 群れたるなかに ただひとり いかなるかたに 飛び行きて 知る人もなく まどふらん
九二二⑤（上）三一六⑤

B1 同じ立場や特性を有する複数のものごとが属する範囲。「なかに」のあとに、特定の人やものごとについてくわしく述べる。一九例。

ア（道長ハ、求婚者ノ多クイタ高松殿明子ト結婚スル）

「コノ明子ヲ」いみじうやむ事なくもてなしきこえ給を、いづれの殿ばらもいかでときこえ給へるなかに、大納言殿「道隆」は、例の御心の色めきはむつかしきまで思ひきこえ給へれば、宮の御前……この左京大夫殿「道長ヲ」、……ゆるしきこえ給て、
三一七⑬（上）一一四③

イ「三条院ハ」同じ院と申なかに、心うるはしく物清くおはします。

一一三二⑪（上）三九二⑤

ウさまざまの御ものけ数知らずののしるなかに、げにさもやときこゆるもあり。又ことの外（ほか）にあるまじきことども、覚えぬ名のりをし、怪しきことどもをも申。
一五二②（上）四三九⑭

例 C その他 「なかに」の前で全体的な状況（前件）を示し、そのあとで、特別な状況が描かれる（後件）。六

ア (村上天皇ノ中宮安子ノ葬送)

五宮「守平」は五つ六つにおはしませは、「幼イ故ニ御服だになきを、あはれなる御有様」[後タノ御營ミ]、世の常のことに変らず過ぎもていくなかにも、よろづおどろおどろしくこちたきさま「万事アレコレトモノモノシク仰々シイコト」はいとことなり。

葬送後のことが普通のこととして過ぎていく、同時に、それは万事仰々しい。二つの側面からことがらをとらえているが、それをつなぐの「なかにも」である。

一24⑧(上45⑩)

イ (道隆ハ高内侍ト結婚スル)

この中納言殿「道隆」、よろづにたはれ給ひけるなかに、人よりことに心ざしありておぼされければ、これをやがて北の方にておはしける程に、

三3⑬(上105②)

多くの女性にうつつを抜かす一方で、高内侍には熱心でついには北の方にしてしまう。道隆という一人の人間を二つの側面から描いている。

ウ (道綱室ガ御産テ逝去シタ)

殿「道長」も、あはれに心苦しきことにおぼし嘆かせ給ふなかに、上「倫子」の御はらからの男にてあまたおはするも、疎くのみぞ。これ「亡クナッタ道綱室」は倫子トハ「一つ御はらからにて、よろづをはぐくみきこえ給ふ。

七12⑪(上2221⑨)

殿もお嘆きになるが、それ以上に倫子がひどく嘆かれる。「なかにも」のあとに他方として述べられていることのほうが程度が強い。

エ (淑景舎女御ハ原子ガ頓死スル)

あさましいみじとは世の常なり。世の中はかなしといふなかに、めづらかに心憂き御有様なり。

無常というだけでなく、これはめつたにないほどつらく情けないありさまである。これは「はかなし」とされていることなかでも特に、と考えるとBに分類されるだろうが、いまは「はかなし」と「めづらかに心憂き」を別々のありさま、気持ちとしてとらえ、Cとする。

オ (御髪上ゲノ典侍、サマザマノ贈物ヲタマハル)

かかる事おのづからさきさきもあるなかに、「こたみの御事に御髪上(ぐしあげ)の内侍のすけのたまはり給やうなる例(ためし)はなくや」とぞ人々申ける。

一九一〇②(下)一〇七③

「なかに」は、ある事がおこっている場所や時間、機会を全体的に表わしたことはである。「なかに」のあとに特別のことがらが述べられる。

カ (関寺ノ牛仏ヲ拜ミニ多クノ人が草ヲ取ツテ持ツテ来ル)

草を誰も誰もとりて参りけるなかに、参らぬ人などぞありければ、それは「罪深きにや」などぞ定めける。

二五一⑧(一)九三⑬

牛仏に参る人、参らぬ人両方を、参らぬ人を強調して述べている。

おわりに

以上のように、源氏物語と栄花物語には「活用語連体形十なかに」の用例が数十例あり、そのなかで、Cに分類される用例が数例ずつある。全般的にいえば、「その場、状況で」というような意味で、「なかに」よりも前の部分には一般的なことがらが述べられ、「なかに」のあとにはより個別的、特徴的なことが述べられる。また、「な

かに」の前にはすぐにとらえられるありさまを描き、「なかに」のあとにはそれとは別の（反対の）面から見たありさまが述べられる。この「なかに」の用法により、より重層的な描写がなされている。

このような「活用語連体形＋なかに」は今回かぎられた作品についてしか調べられなかった。平安時代、あるいはそれ以降の作品ではどのように使われているのだろうか。また、「――なかに」よりは用例の多い「活用語の連体形＋うちに」とはどのような共通点、相違点があるのだろうか。さらにまた、それは現代語の「なか」「うち」の用法とどのようにかかわっているのだろうか（注3）。それらについてはまた別の機会に述べることにしたい。

注

1 「活用語連体形＋うちに」に関する主な文献は以下のとおり

- 遠藤嘉基 「新講和泉式部日記（十六）（十七）」
『國語國文』第二十六卷第一・六号 昭和三二年一・六月
- 原田芳起 『うちに』が接続する文について 文型と意味
『平安時代文学語彙の研究』 風間書房 昭和三七年
- 円地文子 鈴木一雄 『増補版 全講和泉式部日記』 至文堂 昭和四八年
- 堀川昇 「和泉式部日記の『うちに』をめぐって」
『実践女子大学文学部紀要 第二十二集』 昭和五五年

2 用例の調査で用いた文献は以下のとおり

- 『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』 上田英代編 勉誠社 一九九四年

- 『源氏物語大成 校異篇』および『同 索引篇』池田龜鑑編著 中央公論社 昭和二十八年
『竹取物語総索引』 山田忠雄編 武蔵野書院 昭和三十三年
『土左日記総索引』 日本大学文学部国文学研究室編 桜楓社 昭和四十二年
『枕草子総索引』 榊原邦彦他編 右文書院 昭和四十二年
『紫式部日記用語索引 改定増補』 石井文夫他編 巖南堂書店 昭和三十一年
『栄花物語本文と総索引』 高知大学人文学部国語史研究会 武蔵野書院 昭和六十年

3 現代語の「なか」「うち」に関しては次の文献が有益である。

- 『ことばの意味——辞書に書いてないこと 3』 國廣哲弥編 岩波書店 昭和五二年
「ナカ・ウチ」長嶋善郎 執筆
『基礎日本語辞典』 森田良行著 角川書店 平成元年